

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 8 日現在

機関番号：32711

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720245

研究課題名(和文)「在日コリアン」として生まれ育った在韓日本語教師のライフストーリー研究

研究課題名(英文) Research on the life stories of Japanese teachers in South Korea born and raised as "Zainichi Koreans"

研究代表者

田中 里奈 (TANAKA, RINA)

フェリス女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：40532031

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在韓「在日コリアン」の日本語教師25名へのライフストーリーの聞き取り調査から、教師たちの経験と意味世界を捉えるとともに、旧宗主国のことばを「母語」とする人々が旧植民地においてそのことばを教えることの意味を明らかにしたものである。教師たちの中には、日本語のネイティブスピーカーだが、国籍・血統的には日本に属さず、<言語=国籍=血統>の一体化を兼ね備えていない属性のために、日本語教育におけるポジショナリティーに困難や葛藤を抱えている者もいた。ある国籍や血統をもつ者にその言語の正統性を付与してしまう「単一性志向」が言語教育においても見られることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this research, hearings interviews were conducted on the life stories of 25 Japanese teachers living in South Korea as "Zainichi Koreans" to ascertain these teachers' experiences and world meaning, and also to clarify the significance of people who speak the "mother tongue" of a former colonial power teaching that language in the former colony. There are Japanese native speakers among these teachers, but in terms of nationality and bloodline, they do not belong to Japan and have the attribute of not possessing an integrated "language = nationality = bloodline." Therefore, some of them had experienced difficulties and conflict in terms of their positionality within Japanese language education. In this research, it was clarified that a "simplistic orientation" of granting legitimacy for a language to those people with a certain nationality and bloodline can be seen in language education also.

研究分野：日本語教育学

キーワード：在韓在日コリアン 日本語教師 ライフストーリー研究

1. 研究開始当初の背景

現在、韓国では非常に多くの人々に日本語が学ばれている。しかし、日本による植民地時代には、「国語」として日本語を学ぶことが強要されていた。そのため、解放後、日本語は植民地時代を連想させる言語として否定的に捉えられ、公の場で口にするのも憚られるような時代が続いた。このような緊張感の中、日本語は1961年より大学、1973年より高校において教育が再開されたが、再開を反対する声は非常に強かったという。

それでは、このような冷やかな視線が投げかけられていた日本語の教育に教師はどのように携わってきたのだろうか。周囲から「旧宗主国の言語を教える教育」と見られることで意欲を失う教師がいたことや、日本語の学習や教育に葛藤を抱いていた韓国人教師のライフストーリーがこれまで明らかにされてきた。しかし、解放後の韓国において日本語教育に携わってきた人々の中には、ルーツは韓国であるものの、日本語が「母語」であるため、教育現場において難しいポジションに立たされてきた「在日コリアン(注1)」教師もあり、特に日本人教師が韓国に多くは存在しなかった時代には、彼らはネイティブ日本語教師として重要な役割を担ってきた。それにもかかわらず、これまでその存在は十分には着目されてこなかった。

研究代表者は、「在日コリアン」2世の教師に対するライフストーリーの予備調査において、彼らの人生の軌道やアイデンティティの一端を明らかにしてきたが、日本語や日本語を教えることに対する意味づけに関しては、質的にも量的にも十分には捉えられていなかった。また、現在教育の担い手となっている3世の教師たちの経験や意味世界も明らかとはなっていなかった。

注1) 国籍の如何を問わず、朝鮮半島にルーツをもつ日本で生まれ育った人々の総称とする。

2. 研究の目的

以上のような研究背景を踏まえ、本研究は、日本で生まれ育ち、成人してから韓国に渡った「在日コリアン」の日本語教師(以下、「在日コリアン」教師)たちの日本語教育を中心としたライフストーリーから、教師たちの経験と意味世界を捉えるとともに、旧宗主国のことばを「母語」とする人々が旧植民地においてそのことばを教えることの意味を明らかにし、韓国の日本語教育の歴史を新たな視点から描くことを目的とした。

韓国における日本語のもつ意味が時代の変遷とともに移り変わってきていることも踏まえ、これまで行ってきた「在日コリアン」教師2世への調査に加え、3世の教師のライフストーリー調査も行うこととした。

3. 研究の方法

本研究では、以下の方法で研究を遂行する

こととし、特に(2)を重点的に実施した。

- (1) 韓国の日本語教育、在外同胞、帰還同胞に関する論考や政策文書の収集と分析
- (2) 理論的サンプリングを用い、「在日コリアン」2世・3世の教師25名へのライフストーリーインタビュー調査

(2)で言及したライフストーリー法は、語り手の経験や主観的な意味世界を解釈する研究手法であり、また、研究蓄積が少なく、公式統計では把握しにくい対象者、十分探究されていない社会的現実を照射するのに有効であるとされている。個々の具体的な経験や意味づけを明らかにしようとする本研究の目的と、「在日コリアン」教師という研究対象に適した手法であると判断し、採用することとした。なお、インタビュー調査は、すべてICレコーダーによって録音することとし、(1)語り手に自由にライフストーリーを語ってもらう、(2)語り手が言及した内容を再度詳細に語ってもらう、(3)語られていない新たなテーマを投げかけ語ってもらう、という3段階の構成とした。研究期間内に1人につき2時間程度のインタビューを2~3回行った。

収集した音声データは、すぐに文字化を行い、文字化データおよびフィールドノート、メールの文章などをもとに、個々のライフストーリーを分析・考察していった。

4. 研究成果

在韓「在日コリアン」2世・3世の日本語教師が韓国で居住するようになった経緯や理由は様々であった。「母国修学」等の制度を利用して韓国に渡った者、韓国人と結婚したことがきっかけで韓国に渡った者、日本で日本語教員養成等を修了し、日本語教師志望で韓国に渡った者、などがいた。日本語教師という職業に対しても、留学費用を賄うための手段として捉えている者から、慣れない韓国社会での適応・参入を図っていくための一つのきっかけとして捉えている者、日本語を使用することが難しかった時代に日本語を思う存分使用し、心の平安を保つための場を確保するためのものとして捉えていた者など、日本語を教える意味や日本語教師という職業への意味づけは非常に多様性に富んでいた。

しかしながら、多くの「在日コリアン」教師は、日本語のネイティブスピーカーだが、国籍・血統的には日本に属さず、<言語=国籍=血統>の一体化を兼ね備えていないという属性のために、日本語教育の現場におけるポジションナリティに困難や葛藤を抱えていた。

日常生活ではあえて「在日コリアン」であることを明示しないにもかかわらず、日本語教育の現場では「在日コリアン」であることを意図的に表明していたり、あえて日本名を

使用したりするなどして、日本との繋がりや「日本人っぽさ」を見せつけるという戦略を重視する教師もいた。そうした戦略によらなければ、日本語のネイティブスピーカーとしての位置を確保することが難しく、いわゆる「正しい日本語」を話すネイティブスピーカーであっても、「日本人ではないこと」によって「正統なネイティブスピーカー」とは見なされず、容易に排除の対象になりうるということが聞き取り調査から明らかとなった。

このことは、より「正統なネイティブスピーカー」として日本人が評価されてしまうというネイティブスピーカー内部のヒエラルキーの存在と、日本語の評価に話者の所属が大きく関わる現実を示している。ある言語を母語として共有する言語共同体の主要な国籍や血統をもつことが重視される思想＝「単一性志向」の根強さを表しているといえる。個人の中での言語の複数化を促す機能をもつ言語教育であるにもかかわらず、<言語=国籍=血統>の一体化を前提とし、ある国籍や血統をもつ者にその言語の正統性を付与してしまう「単一性志向」の問題を内包しているという自己矛盾を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

田中里奈、「言語教育における「単一性志向」——帰韓した在日コリアン教師の言語/教育経験とアイデンティティに関する語りから」、『わたしはどのような教育実践をめざすのか——言語教育とアイデンティティ』、113-141 頁、春風社、2014 年。

田中里奈、「言語教育学としてのライフストーリー研究」において調査者の構えを記述する意味」、『リテラシーズ——特集：言語教育学としてのライフストーリー研究』、14 号、78-83 頁、2014 年、査読有。

田中里奈、「日本語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」概念——言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから」、『言語文化教育研究』、11 号、95-111 頁、2013 年、査読有。

[学会発表](計 8 件)

田中里奈、「在韓『在日コリアン』の日本語教師のライフストーリー——日本語教育における『言語』、『国籍』、『血統』」、東京大学現代韓国研究センター(CCKS)特別研究会、2014 年 2 月 1 日、於：東京大学。

田中里奈、「言語教育学におけるライフストーリー研究と研究者のポジショナリティ——「在日コリアン」日本語教師の語りから」、言語文化教育研究会 11 月例会、2013 年 11 月 26 日、於：早稲田大学。

田中里奈、「『特別永住権を維持する/放棄する』ということ——在韓『在日コリアン』の語りから」、日本移民学会第 23 回年次大会、2013 年 6 月 30 日、於：武蔵大学。

田中祐輔、田中里奈、山本冨里、古屋憲章、パネルセッション「日本語教育を規定してきたものとは何か——国家政策、民族論、教育思想という側面から」、2013 年度日本語教育学会春季大会、2013 年 5 月 25 日、於：立教大学)。

田中里奈、「在韓の『在日コリアン』日本語教師のアイデンティティと日本語教育における位置取り」、人の国際移動研究会、2013 年 5 月 10 日、於：上智大学。

田中里奈、「在韓「在日コリアン」日本語教師のライフストーリー——《言語》と《国籍/血統》のズレがもたらすこととそれへの対応」、トランスナショナル研究会、2012 年 9 月 7 日、於：名古屋市立大学。

田中里奈、「『ネイティブ性』に関する一考察——『在日コリアン』教師の名のりに関する語りから」、2012 年度日本語教育国際大会、2012 年 8 月 19 日、於：名古屋大学。

田中里奈、「『在日コリアン』として生まれ育った在韓日本語教師の『名のり』の戦略」、2012 年度日本移民学会、2012 年 7 月 1 日、於：関西学院大学。

[図書](計 0 件)

[産業財産権] 出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 里奈 (TANAKA RINA)
フェリス女学院大学・文学部・准教授
研究者番号：40532031

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：